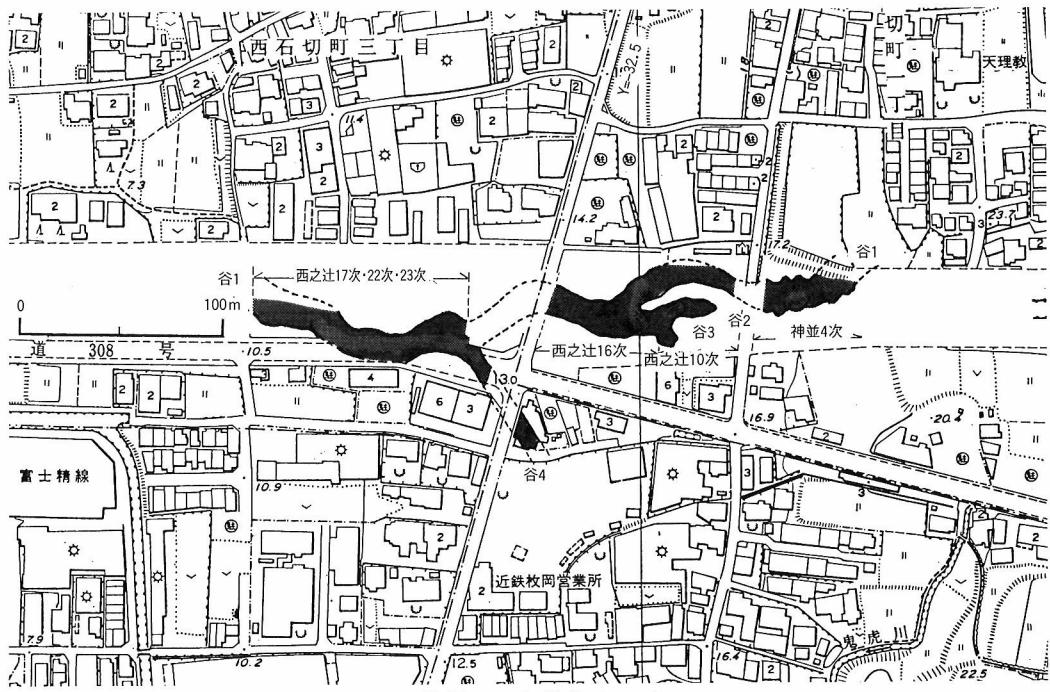


## 7. 神並・西ノ辻遺跡の谷

神並・西ノ辻遺跡の発掘調査によって、調査地内を東西にはしる縄文～古墳時代の谷が検出された。上流より続くこの谷は、蛇行を繰返しながら神並・西ノ辻遺跡内を西流し、調査地西端で北西に流れを変えている。谷1と呼称され、幅7～10m、深さ2.5～3.5m、発掘された長さ約150mを測る。この谷1に合流する谷4は、幅8m、深さ2mの規模で南東より続くものである。また、神並遺跡では谷1に先行して形成された局所的な谷状地形も検出されている（谷2・谷3）。これらの谷の形成時期は、谷1最下層出土の晩期縄文土器や谷1肩部出土の後期縄文土器によって縄文時代後期～晩期と考えられる。谷1と合流する谷4も同時代に形成されたものとみられ、谷2・谷3についてもさほど時期は遡らないと推定される。

縄文時代の堆積層は、谷1・谷4では直経1～数センチの礫を主体とする砂礫と植物遺体を含むシルトとが互層をなして厚さ約1m続いている。出土土器はごく少数で、他に多量のドングリが検出された。弥生時代の堆積層も最下層は縄文時代と酷似する砂礫・シルトの互層であるが、下層になると堆積層に細粒砂～シルトの占める割合が大きくなる。最下層～下層からは少数の前期弥生土器、多量の中期弥生土器が出土し、石器・木器・動植物遺体なども出土した。これらの遺物は、谷4との合流部以東ではしだいに希薄となるが、これは集落の東方へのひろがりが遅れたことによる。合流部以西の弥生時代堆積層の中層にみられる黒色シルト質粘土は、主として谷の岸近くに堆積したもので、この層の形成には人為による廃棄物投棄とのかかわりが推定される。弥生時代中期後半の土器が多量に出土した。また、下面において小児用の壺棺





西ノ辻遺跡第16次調査地  
西端部における谷1堆積  
層断面、谷4との合流部  
以東の縄文～奈良時代の  
堆積層を東より撮影



西ノ辻遺跡第16次調査で  
検出された谷の全景、枝  
分かれの部の右は谷1  
左は谷2・3  
西より撮影



西ノ辻遺跡第16次調査に  
おける谷1内の弥生土器  
出土状況  
谷底より弥生時代中期末  
～後期初めの土器がまと  
まって出土  
東より撮影



西ノ辻遺跡第23次調査で  
検出された甕棺墓  
畿内第Ⅳ様式の甕を使用  
し蓋には別の甕と壺胴部  
片を使用



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された壺棺内の新生児骨



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された木器未製品

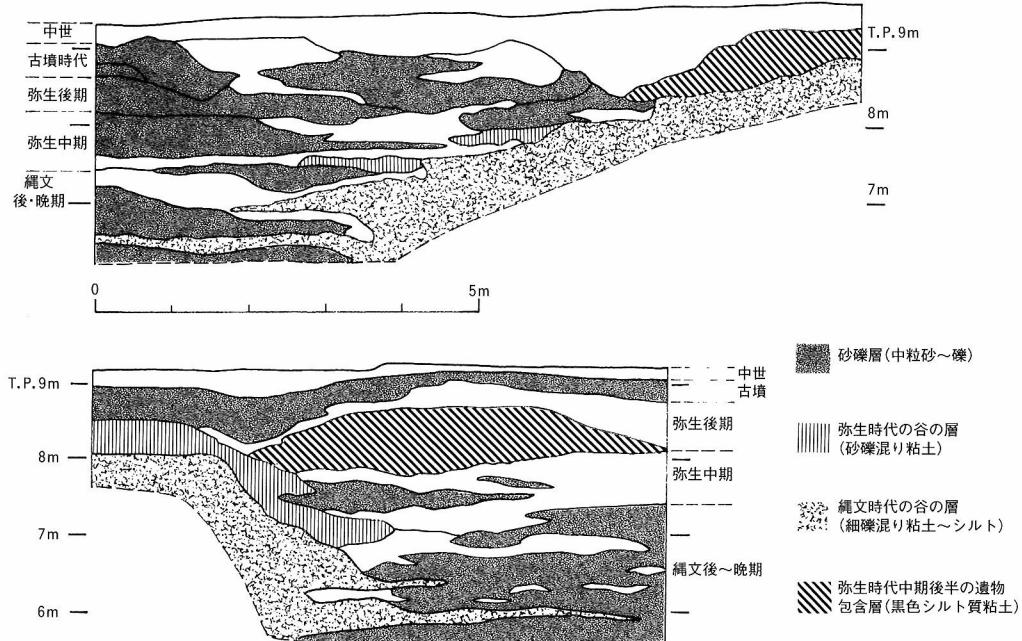
や甕棺、木器未製品貯蔵穴などの遺構が検出されたことから、この時期の谷流路の幅は前代よりも狭くなっていたことが知られる。いっぽう、合流部以東の谷1では、同様の堆積層より弥生時代中期末～後期初めの土器がまとまって出土したが、ここでは谷の埋積が合流部以西よりもさらに進んだ状態である。谷1の埋積はその後も続き、弥生時代堆積層の上層として谷岸部にシルト、流路部に砂礫が弥生時代後期の土器と共に堆積している。古墳時代になると、合流部以東の谷1は浅谷になって谷岸にプール状の水利施設が作られるが、合流部以西では谷4からの流路が依然として維持され、上流より2次堆積の須恵器・土師器を含む砂礫が供給されている。神並・西ノ辻遺跡の谷が完全に埋積される時期は、合流部以東が奈良時代、以西が奈良～中世と考えられる。その後は中世の集落が全面に

広がり、谷の痕跡は残されていない。

谷1の両岸において、弥生時代中期後半の土器を使用した壺棺墓や甕棺墓が多数検出された。壺棺には口縁部を打欠いたものや胴部に焼成後の穿孔をもつものが使用され、甕棺には比較的大型の甕がそのままの姿で転用されている。また、これらの棺の開口部分には蓋として別の土器片が用いられている。棺内に遺存する人骨の鑑定結果によると、壺棺は生まれて間もなく亡くなった新生児のために、甕棺はそれよりもやや大きい幼児のために用いられたと考えられる。これら、河岸の幼児墓に対して、鬼虎川遺跡第12次調査において方形周溝墓主体部より検出された3例の小児骨の年齢は少なくとも3~4才と推定されている。両者を比較すれば成人のための墓地への埋葬にはある種の通過儀礼にもとづく一定の年齢制限があったものと思われる。(芋本)



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された谷1(東より)



▲谷1の土層断面図—西ノ辻遺跡第23次調査西端部 北壁(上)、西壁(下)

## 8. 神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の建物跡と遺物

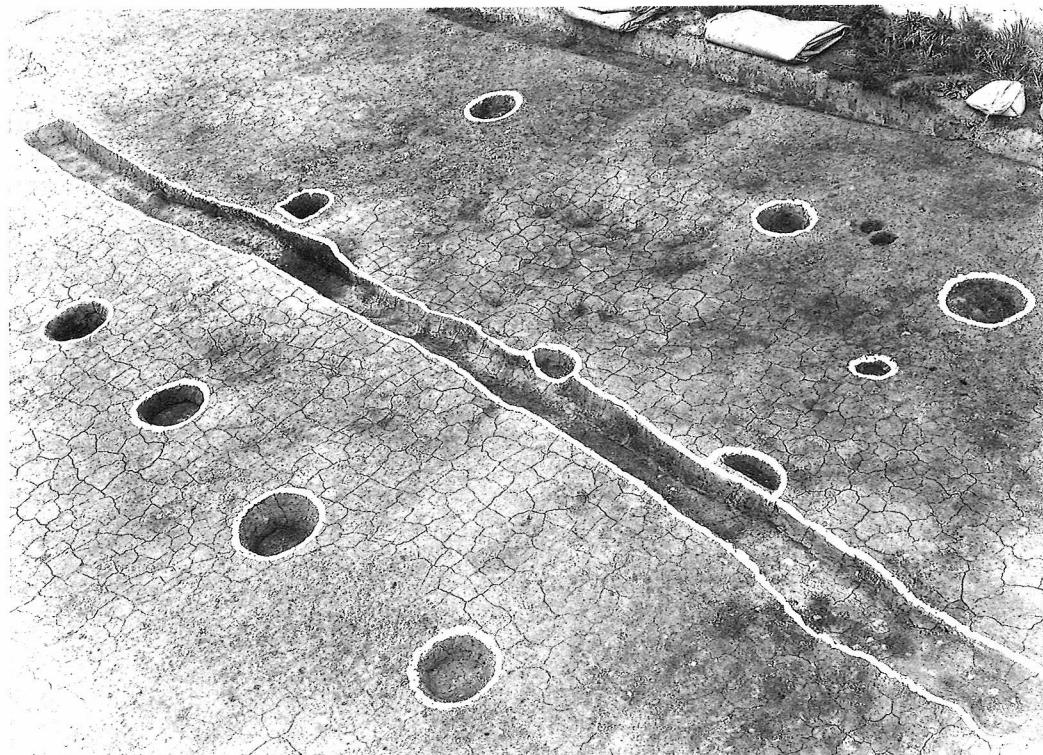
国道308号線関係の発掘調査では、神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡から古墳時代中期末から後期初頭頃（5世紀後半から6世紀初頭）の遺構・遺物が多量に検出されている。神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡からは、古墳時代の集落跡・谷内に築造した水利施設などの遺構や土器類をはじめとして木製品・金属製品・石製品・土製品などが多量に出土している。ここでは、水利施設や谷の概要は別稿に譲り、主に集落跡と出土遺物を取り上げることにする。

3遺跡において確認できた古墳時代の集落跡は、出土している土器類から古墳時代中期末から後期前半頃（5世紀末から6世紀前半）の時期に該当し、比較的短期間に営まれたものである。

また、古墳時代の初め頃や古墳時代後期中頃以降の遺構・遺物はほとんど認められない。このような様相は、この3遺跡と同様な位置に立地する日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・植附遺跡・鬼塚遺跡・市尻遺跡・縄手遺跡においても看取できる。

3遺跡内には、東から西に向かって流下する谷があり、この谷に挟まれた高所に集落が展開していたものと推定できる。調査地点が、3遺跡ともこの谷筋にあたるため、建物の検出例は少ない。

次に3遺跡で検出できた同期の遺構について個別に記述していくこととする。神並遺跡では第3次・5次調査でそれぞれ1棟の掘立柱建物を検出している。第3次調査では、東西2間、



▲神並遺跡の掘立柱建物